

### 研究計画・目的：

本研究では、いままで行ってきたプガチョーフ叛乱について、さまざまな側面から総合的に研究することを目指している。当該研究者は、叛乱の民族的側面、ロシア人農民の参加過程、カザークの動向、そしてそれらがいかに叛乱の動きを左右したのか、またその中で宗教や僭称問題がどのような役割を果たしたのかをすべてにわたって関連付けて考察する。以上の点を総合的・俯瞰的に考えようとするのが本研究の目的である。以上の目的遂行にあたり、当初はロシアでの古文書の調査研究を考えていたが、ウクライナでの戦争が勃発したため、行き先を帝政ロシア時代の刊行本がすべて揃っているフィンランド・ヘルシンキ（ヘルシンキ国立図書館）に変更した。そこで本研究テーマを遂行するための計画として、第1にはプガチョーフ叛乱に関連するすべての文献に目を通すこと、第2には叛乱前夜、叛乱期、叛乱後の3期に分けてその違いを明らかにすることとした。

### 研究活動：

今年度新たに導入された新特例措置のため、外国と日本での研究に従事することができた。研究テーマは「プガチョーフ叛乱の総合的研究」である。在外研究を利用して、叛乱勃発250周年を来年（2023年）に控えて国際学会での発表の準備をすることも念頭に入れた。さらに同叛乱の全体像を明らかにするために、「プガチョーフ叛乱—世界史の中の「ロシア的叛乱（ルースキー・ブント）」」と題するモノグラフ執筆にも向かった。これが目指すのは、叛乱がどのようにして発生し、その動向はどういうものであり、最終的にはいかなる結果をもたらしたのかを、ロシア全体の歴史の中で見極めることである。具体的には、18世紀ロシアの国家と社会について全体的な概観をしたうえで、叛乱前夜の国家と社会の不安定さについて述べ、叛乱中の社会全体の動きを詳らかにしようとした。そのために、日本と外国での研究方法が異なっていたのは言うまでもない。

日本では、明治大学と北海道大学を研究の拠点として、従来発表してきたプガチョーフ叛乱に関する論考の整理を行いながら、国内でできる限りの資史料の収集に努めた。明治大学に所蔵されているロシア語と英語の基本図書を利用して、叛乱とその前後の時代について概観した。北海道大学附属図書館に所蔵されている刊行されたロシア語と英語の文献を利用して、研究の過程で浮上した問題点をある程度解決することができた。

5月27日から8月24日までの約3か月間、フィンランドの首都ヘルシンキにある国立図書館（旧ヘルシンキ大学附属図書館）内にある「スラヴォニック・ライブラリー」での研究活動に従事した。ここが外国での研究の拠点となった。フィンランドは19世紀初頭にスウェーデンからロシアに割譲されたこともあって、ロシア帝国の図書館と同様に、ここに帝国で刊行された書籍のすべてが納められている。さらには帝政時代の定期刊行物が開架式なので自由に手にとって読むことができる。これがロシアへ行けない代わりに選んだ最大の理由である。

刊行された文献が豊富にそろっているフィンランドでの調査研究は、ロシアでの古文書

史料調査の方法とは異なっている。そのこともあって、フィンランドでは所蔵されている文献すべてに目を通すつもりであったし、実際その通り実行した。エカチェリーナ二世の刊行された布告、19～21世紀世紀に出版された論文、著作、さらには文学作品を含めたあらゆる刊行物に目を通すことができた。しかし最大の発見は、叛乱が鎮圧されて諸外国ですぐに出版された著書だった。たとえばフランスで刊行された F. S. G. W. D. B. *Le Faux Pierre III. Ou la vie & les aventures du rebelle Jemeljan Pugatschew. D'après l'original russe de Mr. F. S. G. W. D. B. Avec le portrait de l'imposteur, des notes historiques politiques*, London: C. H. Seyffert, En Angel Court Westminster, 1775、スウェーデンで出た *Uprorsmannen, Jemeljan Pugatschws Lefverne, ifrån ryska originalet öfversatt på fransyska, och sedermera försvenskadt af Carl Leonard Stålhammar. Le crime a ses héros, ainsi que la vertu*. Stockholm, Tryckt hos Joh. Christ. Holmberg. 1786、そしてドイツで出版された *Bemerkungen über Esthland, Liefldsnd, Russland: nebst einigen Beiträgen zur Empörungsgeschichte Pugatschews, während eines achtjährigen Aufenthalts gesamlet von einem Augenzeugen*, Leipzig, 1792、以上3冊である。この3冊はスラヴォニック・ライブラリーとは別にある図書館の特別室で閲覧した。鉛筆での筆写、写真撮影とコンピュータでの打ち込み以外は許されなかったが、撮影した写真を利用して上記の文献を詳細に読むことで、プガチョーフ叛鎮圧直後の諸外国での対応が分かるのである。

以上の研究によって、プガチョーフ叛乱の全体像およびロシア史上におけるその意味を明らかにしようとした。

#### 研究成果：

本研究テーマに従って研究を遂行した。とくに上で述べたモノグラフの執筆を進めることができた。これは全体では8章で構成されるが、そのうちの6章がほぼ完成した。

このモノグラフとの関係で、とりわけプガチョーフ叛乱前夜の状況について詳細に調べた。たとえば1771年に発生したモスクワでのペスト一揆に関する19世紀の文献を中心に調査することができた。これは1771年9月15～17日（新暦の9月26～28日）にモスクワで起きた民衆の一揆である。蜂起は1770～72年のペスト発生と事実上の都市当局の無作為によって生じた。これは厳しく鎮圧されたが、この後、都市当局は状況改善に取り組み、モスクワでのペスト発生は起こらなかった。とくに注目したのはペスト一揆勃発の原因である。その第1にあげられるのは、都市当局の側から感染に対する有効な手段を打たなかったことである。第2に、都市では飢餓が始まったことである。役人たちは文字通り都市を見捨て、見捨てられた市民の間に食糧不足、さらには噂とパニックが広まった。第3に、そしてそれが直接的な引き金になったのが、モスクワ府主教アムヴローシーの行動であった。ペスト治癒の有効な手段が当時では欠如していたために、民衆にとってペストと闘うための最も有効な手段は祈りと呪術のみであった。とくにモスクワ市民のあいだには、キタイゴロド

地区のヴァルヴァーラ門の壁にかかっている奇跡成就の敬神生神女のイコンが疫病を治癒するのに役立つという噂が広まった。人々は門の壁からイコンを外し、静かな祈りを捧げた。府主教アムヴローシーは、たくさんの人が密集することが感染症を拡大させると考え、また略奪者が運び去らないようにという思いから、イコンへの祈りを禁じた。しかし市民はアムヴローシーの行動を理解しなかった。民衆は、アムヴローシーがイコンの庇護を願って祈ることができないように悪意からイコンを隠したのだと考え、またそこで集められた喜捨を自分のものとしたのだという噂を信じた。人々はパニックになり、制御できない状況に陥ったのである。最終的には府主教の殺害にまで至るのである。

以上は、プガチョーフ叛乱勃発の僅か2年前の出来事である。叛乱の原因を考える重要な事実であり、当時の社会を考えるうえでも最良の例である。こうした研究の成果は、2022年9月23日の「日本18世紀ロシア研究会」で「プガチョーフ叛乱前夜の国家と社会—1771年のモスクワのペスト一揆を中心に」と題して発表した。さらに、2023年7月開催予定の国際学会「the XI International Conference of the Study Group on Eighteenth-Century Russia」で「Old Believers and Pugachev Rebellion」という題目で発表することとなった。

#### 今後の展望：

上で述べた現在執筆中のモノグラフについては、2022年12月を目途に原稿の完成を目指している。また「日本18世紀ロシア研究会」での発表は、2023年3月に原稿を提出して同年8月までに「日本18世紀ロシア研究会年報」で刊行される予定である。くわえてすでに述べた通り、在外研究での研究成果を踏まえて2023年7月に国際学会での発表を行う予定である。

#### 教育への効果：

現在受け持っている文学部史学地理学科1～4年生および文学研究科史学専攻博士前期課程～博士後期課程の院生、以上を対象とする授業のなかで、上述の研究成果が生かされている。たとえば、史学概論は歴史学の基礎を考える学問であるが、その基本となる資史料の探し方、および史資料そのものへの批判、研究文献の取り扱い方などを、在外研究での実際の活動の様子を示しながら授業を展開している。また、大学院生を対象とする授業では、より詳細に具体的な資史料を例示しながら、その資史料の性質、その扱い方、などを教授することで、彼らの論文執筆に役立つよう努力している。そのこともあってか、学制の反応は良好である。